

# センターの役割、自身の役割、 自問しながら過ごした2年間

## ECPRの印象

感じたことを思い出します。



愛媛県研修所  
所長

小池 賢治

「えひめ地域政策研究センター」（略称「ECPR」）への異動が決まった時、「まちづくり」に情熱のある多くの人が集まって来て、『ああでもない』『こうでもない』と議論する”とにかく面白いところ”という期待感と、自分が“すごい人達”についていけるかなという不安感を抱いて着任しました。しかし、行ってみると、静かで落ち着いた雰囲気”普通の事務所”で来客も殆どなく、少し“拍子抜け”した印象でした。

それが5月、6月になって事業が本格化すると、いわゆる過疎地域等を“なんとかせにゃいかん”という、どこかで聞いたような言葉を胸に、センター職員が、松山から車で2時間以上もかかる山村や漁村に毎日のように出かけ、地域の魅力や頑張っている人を取材して情報発信し、住民と地域の将来について夜中まで話し合う会を支援するなど、現場に視点を置いて、現場の空気を肌で感じ、そこで暮らす人々の意見に耳を傾ける活動に真摯に取り組む姿を見て、「まちづくり」を担うセンターの存在意義を強く実

## 「まちづくり」とセンター

私の赴任した平成26年度は、人口減少問題が急にクローズアップされ、増田寛也氏等が唐突に「集落の消滅」というセンセーショナルな（根拠の薄い）警鐘を發表し、安倍政権も地方創生という新たな施策を打ち出すなど、国全体が人口の増減によって赤・青・黄色に色づけされ、何を今さらという違和感を持った年でした。

センターでも、移住対策や地域づくり支援活動を担っており、目に見える成果を求められるのではないかとというプレッシャーも感じつつ、職員も危機感を持ち、地域を元気にするためにもっと効果的な活動はできないか、移住にかかるとホームページを見やすく改定しよう、地域おこし協力隊の支援を強化してはどうか等、いろいろ試行錯誤も行いました。

しかし、「まちづくり」は一朝一夕に実を結ぶものではなく、長期間に亘って地域と一緒に活動していくことが大事であり、悲しいかな、センターは、県や市

町、民間等からの派遣職員で構成され、しかも今まで地域づくりの経験がない職員が2〜3年で交代していく場合が多いので、年度が替わるたびに振出しに戻るような無力感もありました。

プロパー職員のいないセンターができることは、年度が変わって職員が異動し



地域の将来を考える住民集会（新居浜市別子山地区）

でも、関わった地域とセンターとの連携は継続していくこと、近年、NPO等で地域づくりに携わる団体も増えているので、『地域を支援できる組織や人』と『支援が必要な地域』を結びつける“仲人”役を果たしていくことではないかと思えます。平成27年度に「えひめ地域づくり研究会」という愛媛県の地域づくり活動に長年携わってきた指導者の団体と一緒に新居浜市別子山や砥部町広田地区に関わっていく試みをしたり、愛媛大学に新設された社会共創学部と協働できないか模索するなど、右往左往しながら過ごした2年間でした。



現地体験を通じ地域の良さを再発見(地域づくり人養成講座)

### 「シンクタンク機能」とセンター

センターは、社会経済研究所の流れをくむ「シンクタンク」の役割も担っていました。年2回発行している「ECP R」という同名の機関誌の編集では、研究テーマをどうするか、毎回、みんなが悩みながら、学識経験者や活動の実践者等から寄稿してもらい、県内の行政や関係団体等に情報提供し、“新たな気づき”や“先進的な事例”に触れていただけけるよう頑張りましたが、一方で、どれだけの人か読んでいるのだろうという不安も大きく、IRCのように研究成果をマスコミ等でPRできないかという悩みもありました。

更に、私自身は、県行政の課題の一つとして、PDCAサイクルにおけるC(チェック)機能が弱く、いわゆるアウトカム(成果)指標である統計データを的確に分析・考察し、A(アクション)につなげていく必要性を感じていました。

一つの試みとしてセンター在任中に、国の『社会保障・人口問題研究所』による市町村別の人口将来推計データをグラフ化・見える化する業務に着手し、職員にも手伝ってもらって各市町に資料提供でき、一部の市町からは非常に参考になったというお話もいただくなど、若干、シンクタンク的な役割も果たせたのではないかと思っています。

なお、県のシンクタンク機能を充実さ

せるには、ECP Rと愛媛県研修所の連携も一つの案ではないかと密かに考えています。

### 心残りと感じ

所長として、センターの存在意義を地域にもっとアピールして活用してもらうことや、前述したセンター特有の課題解決に至らないまま異動となり、若干、心残りもありますが、市町や民間から来た方々と一緒に過ごした時間は、私の知らない世界に触れることができた貴重な経験でした。本来であればセンターの事業を通じて派遣いただいた企業等に恩返しをしたかったのですが、私の力不足をお許しただきたいと思えます。

最後に、職員全員で掲げた県内の旧70市町村をすべて訪問するという目標は、言い出しっぺの自分が魚島と関前、面河、美川、一本松の5か所に行けなくて残念な結果となりましたが、本当に楽しかった2年間に感謝したいと思えます。



政策研究セミナー(域外からお金を稼ぎ循環させるまちづくり)